

# 発刊に寄せて

教職課程講座センター室長 川村 覚 昭

現在、我が国の教育現実は混沌とした渦のなかにある。毎日のように繰り返される大人から子どもにいたる不可解な事件や出来事は日本社会の不安定性を物語っている。

人間は、誰しも子どもから出発し、教育の結果、大人となることは言うまでもない。その意味で、教育は人間にとって不可欠な事象と言わなければならない。それ故、現代日本の教育現実が混沌としていることは、人間にとって不可欠な教育が人間形成の機能を十分に果たしていないところに根本的な原因があると見ることができるであろう。

もとより教育は人間が行う行為である。従って、教育が人間形成の機能を十分に果たすためには、人間自身が自ら「教育するもの」として教育可能な能力と資質を持たねばならないであろう。しかも教育は、他の人間行為と違って、時間的可逆性を許さない。人間は、子どもから大人へ成長するものとして一回限りの人生を生きるものであり、子どもが成長過程で受ける教育的影響は子どもの発達にとって極めて深大な意味を持っていると言わねばならないのである。

20世紀末から喫緊の問題になり、試行錯誤している我が国の教育改革は、幼児教育から高等教育に及んでいるが、その背景に国際社会と比べて余りにも脆弱な我が国の教育水準があることは周知の事実である。子どもの学習意欲の喪失、自らの精神生活を堅実に築こうとしない自己中心的な生活態度、年齢に応じた判断力と良識の欠如、などは既に指摘されて久しい。しかし、人間の人間的な成長が教育の結果であることを考えると、現代日本のこうした状況は、基本的に子どもに関わる「人間」の問題に集約されてくるであろう。

従来、本学では、創設者の荒木俊馬博士が「建学の精神」で示された「大学は最高の研究・教育の機関である。大学の使命は、将来の社会を担って立つ人材の育成にある。」という教学理念に立って、多大な人材を教育界に送り出してきた。我々は、この理念をこれからも益々大事にして人類社会のために有為な人材を育成したいと考えているが、最近の混迷した教育現実とそれを背景に進行している教育改革の現状に鑑み、本学でも、我が国の教職教育の発展に寄与すべく、新たに「教職教育」についての学術誌『京都産業大学教職研究紀要』を発刊することになった。

今年度は、幸いに本学が開学されて40周年という記念すべき年である。この佳き年に人間教育の本質に関わる学術誌を江湖に供することができることは関係者として望外の喜びである。研究者を始め多くの読者諸賢の眼に触れることを切に望む次第である。